特定非営利活動法人ブッダ基金

第 19 期（令和元年 8 月 1 日から令和 2 年 7 月 31 日まで）の事業報告

医療福祉支援事業

■子どもの眼科検診プログラム

BCML で学校を訪問する際に、眼科検査技師が同行してリーディングキャンプ中に眼科検診を実施。
Himalayan Eye Hospital Pokhara が検査技師の手配、器具、技術的支援を行った。眼科検診は年間 24 回実施予定であったが学校との調整が前年度期末までにできていなかったため、19 期は未実施。

教育支援事業

■こども移動図書館プロジェクト(BCML)

第 12 期から、ネパールの山間部に位置する村や学校に本を届ける（貸し出す）プロジェクトを実施。2017 年 6 月に拠点図書館を移転し、ポカラの中心部の比較的学校から近い場所を拠点とし、日本から送った移動図書館車「にいみ号」により山間部の学校に本を届ける活動を継続。従来の蔵書パックを学校に届ける活動は参加各校年間 5 回、 1 回あたりの貸し出し期間は 2 か月とし、2017 年 12 月末から”Reading Camp”を通常プログラムとして実施。従来からの活動に加え 18 期から始まった文具支援、眼科検診以外に学校と地域住民の自立支援のために、国立紅茶・コーヒー委員会と協働でコーヒー栽培ノウハウの講習をガルミ村の Mahendra Secondary School で実施。すでにコーヒー栽培を始めた参加者もいる。

＜活動内容＞
① 文具支援事業
読書キャンプで訪問する低カースト家庭の児童が通う学校で良い発表をした生徒に対し文具を贈呈した。
HBF の予算を半額しか承認しなかったため、19 期は単純に行く先々で配布することはせず、良い発表をした生徒に限定した。
2019 年度の実績
支援内容：ノート、ペン、鉛筆
受益校：43 校　　受益者数:　2067 名
ノート配布：8113 冊
ペン、鉛筆配布：2067 本

2）バガワティ小学校　コーヒー園

2009 年 1 月にバガワティ小学校の運営費捻出のためにコーヒーの木を 1400 本植樹し始まったプロジェクト。NGO ヘラロ・アカデミーと協力し、学校の裏庭にコーヒー園を造成。その後、溜池増設工事、学校校舎裏の木の伐採工事（日照確保のため）などコーヒー園の環境改善に取り組んできた。「品質の維持」、「収穫量の向上」、「学校の運営費捻出」が課題であった。2017 年から収穫量は徐々に向上し、2018 年には生豆にして約 500kg、2019 年は 750kg の収穫があった。学校の年間運営資金は最低 NRs.160,000 必要。
2015 年末に支援終了の予定であったが、2018 年まで延長し、金銭的な支援は終了するがマネージメントは販路開拓が軌道に乗り、安定するまで継続して関わる。
2019 年 2 月に UCC を訪問し、上島会長、若山部長と面会し、以前からバガワティ産の豆購入にご協力いただけるとのことから 18 期は実務者レベルに話を落とし込んだ。ジャガン氏の協力により 2019 年 9 月に航空便にて羽田で通関し、生豆 200kg（20kg×10 袋）を単価 1,900 円/kg の合計 380,000 円で UCC に販売。この価格はスペシャルティーコーヒーの価格に匹敵する。実際ジャガン氏が来日中にテスティング依頼をしたところ、ぎりぎ

りスペシャルティーコーヒーに入ることを確認。今回の UCC との取引を機に社会貢献活動としてネパールでコーヒー栽培の講習を 5 月派遣団で現地の学校で実施する計画だった。残念ながら、コロナのため延期。

3)ヘラロ奨学金事業

2016 年のネパール地震により、被災した子どもの教育支援として 2018 年 4 月に本事業運営資金としてブッダ基金から NRs.100 万をヘラロ・アカデミーに供与した。2018 年 5 月から 2019 年 4 月まで資金運用し、年利 12%で得られた利息を奨学金として事業を実施する。PJ は 2019 年 4 月から開始された。コロナによる学校閉鎖のため、学校からの報告がヘラロに未着。具体的な報告は後日。

4）スポーツ普及プロジェクト

ネパールでは、体育の教師が少なく（地方の小学校は特に)、広い校庭がない学校が多いことから、スポーツに親しむ機会が乏しい。
また、ネパールでは地域が学校を運営していることを鑑み、学校と地域のつながりをより密にすることを狙い、学校を中心に地域の大人も参加するような「運動会」のようなイベントを実施したいと考えた。
18 期から、最初の事例としてバガワティ小学校で擁壁工事終了後に「運動会」を開催。19 期も 5 月に計画していたがコロナにより中止となった。

女性の自立支援事業

１）ヒマラヤ・クッキープロジェクト

ネパールの GDP で最も大きい割合を占める農業と観光産業。貧困の中で暮らす女性の自立支援を農業・観光と結びつけることで収益事業化を図る。ネパールの特産であるコーヒー、紅茶、ピンク岩塩、ヒマラヤ蜂蜜、ジンジャー、ヤクチーズ を用いて作ったクッキーの販売を行う。ネパールはいわゆる、ばらまき型のお土産がほとんどなく、お土産文化があるアジア系の観光客への販売が見込める。また、カフェ文化の黎明期であるネパールには日本のような美味しいスイーツがなく、ヒマラヤ登山の入り口であり多くの海外からの観光客が訪れる我々の活動拠点のポカラはカフェ、レストラン、ホテルにも導入を見込める。
ネパールは観光産業が発達している割には旅行者が気軽な土産として購入して会社や友人に簡単に配れるものがない。
パシュミナ、ミティラー・アートやイラム紅茶などはそれぞれ素晴らしい品物だが、個人消費に向きばらまき型のお土産にはならない。購入しそうなアジア系潜在顧客は年間約 16 万人。約 13 万人いる欧米系観光客には社会的支援をアピールしストーリー性を持たせることにより販売を伸ばせることが期待できる。（産業形態が似ているインドネシア・バリ島のバロンクッキーからヒントを得た。）想定している購入しそうな潜在顧客は年間約２９万人。
ネパールの現地パートナーであるジャガン氏の 3 か所のコーヒーショップとカトマンズの土産物店、コンビニでも販売を開始。観光シーズンには一日に 10 箱のオーダーが入ることもあり、導入から 1 年でようやく観光客や常連客に売れ始め販売の基礎ができ始めた。1 月には 2020 年 Visit Nepal に向け新商品のマドレーヌのレシピを開発し、シャリカさん、スマさんが浜松で研修。帰国後シャリカさんがラチャナさんにレシピと作り方を教え、食品衛生局に検査と販売ライセンスを申請。その直後からコロナによりネパールロックダウンとなり今現在は生産・販売を停止している。FY1920 の収支報告は別紙参照。

JICA 応募事業

兼ねがね、BCML の活動維持を将来にわたりどのように継続維持していくかが課題になっていた。18 期の理事

会で山口名誉理事長からいくつかの選択肢のご提案があり、理事会で JICA 応募が決定。
2019 年 11 月の JICA 草の根支援事業（3 年間 1000 万円）に、BCML 活動で応募するも、今回は採択には至らず。
“カスキ郡の過疎地域における図書館活動を中心とした基礎教育改善のための教員支援事業”として申請。
内容については、現地の人々が抱える以下の課題解決に向けたプロジェクト内容とした。
＊教育においては国レベルでは様々な取り組みが試行錯誤行われているが、対象地域のような末端の地方農山村部の学校まで改善は及んでいない。そのため、子どもたちの基礎教育の質は改善されないまま現在に至っている。
＊基礎教育の質の改善は、それを日々前進させる役割を担う教員の質に直結している。基礎教育の向上を現場で進める教員の資質が教員間、学校間でばらつきがある。
＊対象地域では学校卒業後、教員として採用されると多くは定年まで同じ学校で勤務する。そのため教員は、新たな学びの機会がなく惰性的な指導になりがちである。また、対象地域は殆どがローカースト家庭の子女のため、親の教育への関心や子どもの勉強に取り組む姿勢が低い事も教員のモチベーションの低下につながっている。
＊一般的に基礎教育の中心は読む事（読解力）に重点が置かれていると言われている。小学校では読み方（読解力をつける）を学び、小学校以降はより高度な学問を学ぶために読書すると言われている。Bill Gates Foundation や US AID も基礎教育では授業の内容よりも、読む（読解力）に重点を置いた活動を行っている。地方の学校ではなかなか進まない基礎教育の改善を、子どもが本を読む（読解力をつける）事を重点的に、この分野において指導力が不足する教員の経験や資質を補う必要がある。
＊対象地域の政府学校の多くは図書室がなく、子どもたちが教科書以外の図書に触れる機会も限られているため教員も読書活動による読む力（読解力）の導き方が分からない。
＊ネパール政府も子どものみならず、地域の大人にも学校や公共施設に図書館などの、Community Learning Center を作り、村人への識字教育、技術の習得、所得向上活動、行政から受けられるサービス等の情報提供を積極的に行っていく政策を打ち出している。

海外派遣事業

1）第 35 次ネパール派遣団

・期間 2019 年 8 月 10 日(土)～8 月 16 日(金)
・参加人数: 2 名　　加藤義一 理事長、山田清美（事務局）

＜活動内容＞
　・JICA 草の根支援事業申請のための調査活動
　・取引銀行の定期預金更新。

2）第 36 次ネパール派遣団

・期間 2019 年 11 月 6 日(水)～11 月 12 日(火)
　加藤義一理事長

＜活動内容＞
　・ネパールにおける外国籍口座取り締まり強化によりブッダ基金名義の現地資金をどうするかへラロメンバー、HBF と打ち合わせ。

3）第 37 次ネパール派遣団

・期間 2020 年 1 月 31 日(金)～ 2 月 5 日(水)
　加藤義一理事長

＜活動内容＞
　・ブッダ基金名義の現地資金を全てニイミ・ブッダ基金のメッシュ・ロッシュ・ジャガン氏連名口座に移管手続き

4）第 38 次ネパール派遣団　=> コロナのため中止

・期間 2020 年 5 月
　加藤義一理事長、片岡理事、UCC、山田

＜活動内容＞
・UCC コーヒー栽培講習
・運動会
・BCML 活動視察
・ヘラロ奨学金視察
・クッキープロジェクト営業等

その他の事業

1）アドボカシー事業

ネパールの社会問題をポカラ大学と共同研究し、当基金が実施するプロジェクトを学術的な手法により社会的インパクトの計測、クッキーPJ などを現地主要産業とむすびつけ事業化する新規ビジネスモデルの構築に関する研究により特定のケースだけでなく、国全体に面的な展開が仕組みとしてでき、政策として実施できるようアドボカシー活動を実施する。
１９期は活動延期

2）在浜松ネパール人との交流事業

浜松及び静岡県西部に在住するネパール人と共にイベント等を行い、ネパールやブッダ基金を広く知っていただくことを目指す。また、ネパール人同士のつながりを広げ、貧困や孤立状態の人を手助けできるきっかけとしたい。
１９期は活動延期

以上